

エネルギー対策で医療関係者3人

マラウイから視察団

鋳物メーカーを見学

エネルギー不足に悩むアフリカ南部のマラウイ共和国を支援する、鋳物メーカーの虹技（姫路市大津区）に、同国の医療関係者3人が視察に訪れた。廃棄物を新たな資源として再利用している工場を見学したり、同社が製造を支援し、同国での設置に協力している太陽熱ボイラーについて意見交換したりした。

虹技によると、同国は電

気やガスが国内に十分行き届かず、燃料を薪に依存。森林伐採が進んでいるほか、生水を飲んで体を壊す人も多いなど、衛生面の課題を抱えている。

同社は4年前から、太陽熱で湯を沸かすボイラーを同国に届ける活動をしているNPO法人カラーバス（山口県）を支援。ボイラーの製造・販売会社に開発場所の提供もしている。ま



太陽熱ボイラーの開発現場を見学するマラウイの医療関係者ら＝いずれも姫路市大津区勘兵衛町



マラウイの窮状を訴えるベストイド・ソコマさん（右から2番目）

た、ボイラーの設置方法を学んだ社員を同国に派遣。現地では病院などに18台を

設置し、調理や煮沸消毒に活用されているという。

来日したのは、マラウイの病院で副院長を務めるベ

ステイド・ソコマさん

（54）、診療所に勤務するエ

ミリー・ムワカスングラさ

ん（42）とジェームズ・ピリ

さん（44）。カラーバスが活

動の一環で日本に招待し、5日間の日程で兵庫、福岡、山口県の大学や病院などを視察した。

今月5日に虹技の姫路東

ん（77）＝播磨町、同国に派遣されていた虹技の社員らとも懇談した。

ピリさんは見学した同社工場について「製造過程で出た廃棄物を再利用する仕組みに感心した。母国でも参考にしたい」。ソコマさんは「太陽熱ボイラーは画期的だ。天候に左右される難点があるが、用途をもっと広げたい」と話していた。

（井上 駿）

工場を訪れた3人は、鉄のスクラップを溶かして再利用する工程や太陽熱ボイラーの実験機などを見学。同社の山本幹雄社長（64）やボイラーの開発者で製造・販売会社社長の福寿喜寿郎さ